

第 279 回 公開講座 「玉縄城と本牧郷 小田原北条氏の進出と本牧の役割」

2021年（令和3年）11月14日（日） 13:30 ～ 15:40

玉縄学習センター分室・第3集会室（たまなわ交流センター2階）

参加者 38名（会員 30名、一般 8名）

※ 講師 相澤 竜次氏（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 横浜市八聖殿郷土資料館 館長）

【 公開講座開会前に～講師の紹介～ 】

玉縄歴史の会・関根会長が公開講座の開会に先立ち、講師の相澤氏を紹介しながら「本日は、当会の公開講座では大変珍しいテーマで、興味深いお話を聞かせていただけます」と挨拶をしました。

続けて、講師の相澤氏が自己紹介を兼ねて館長として勤務する「横浜市八聖殿（はっせいでん）郷土資料館」について「横浜・本牧の丘に立つ博物館で、昭和8年（1933年）大正から昭和初期に逋信大臣や内務大臣など歴任した熊本県出身の政治家・安達謙蔵の別荘として建てられました。安達氏は日本放送協会（NHK）や羽田空港などの創設に携わり、渋沢栄一と共に近代日本の建設に功績がありました。また、「選挙の神様」（※1）と言われ選挙参謀として手腕を発揮した人物です」と説明されました（配付資料―「横浜八聖殿（はっせいでん）郷土資料館」）。

【 はじめに 】

講師は、本講座ではなぜ戦国時代が始まっていったのか。戦国時代と呼ばれている乱世の時代、当時の日本国内はどのような危機に見舞われていたのか、その背景にあった出来事を見直しながら、その中で、小田原北条氏はいつ、どこから現れ、どのようにして玉縄・本牧・三浦へと進出し、関東一円を制していったのか。また、所領拡張の中で、拠点がどのように動いていったのか。小田原北条氏にとって本牧はどのような場所であったのか。秀吉軍による小田原攻めまでの期間を、関係する史料を読み解きながら解説・講演されました。

〈戦国時代以前〉

【 なぜ戦国時代が始まっていったのか、その背景 】

■ 戦国時代に入る前の中世の日本で起きた変化

◎ 国内の変化―人口・生産性の向上

(1) 国内の人口の増加

平安から鎌倉時代の500年間の日本の総人口は600万人程度で推移し、室町時代中期には100万人程度に増大したと考えられている。

(2) 惣村・郷村の成立

鎌倉後期から地頭が力を伸ばし、荘園公領制が崩れ始め（注）、農民たちも住居を集めて暮らすようになり、惣村・郷村と呼ばれた村組織（※2）が形成され、灌漑設備の共同管理・家畜の利用・米と麦の二毛作の干ばつ対策・鉄製農具等が普及し始め農業生産性が向上した。

(注)「守護地頭の台頭と荘園綱領性のくずれ」の説明

講師は荘園制度の関係図をグリーンボードに板書して詳しく説明しました。

▼ 寄進地系荘園の成立

* 10世紀以降の荘園制度は、① 荘園所有者が、中央の国家権力を構成する貴族・大寺院である、② その所在地が荘園所有者の居住地から遠隔の地にあることを原則として、③ そのため、荘園所有者は現地に経営の拠点一荘所を設定した。

* 9世紀になると、初期荘園経営主であった貴族や大寺院は、かれらの政治的地位の変化によって急速にその経営力を失って荘園の荒廃を招いた。一方、農民自身も荘園内の荒地を自力で開いて治田として独立自営化する力を蓄積した。九世紀末になると、自営化した農民や、地方で土地所有を進めていた豪族は、その土地を寺社・官人・貴族等中央政権の有力者に寄進して、その権威の下に国郡の入部を拒否した。寄進者は、その動機は自己の所有地にかかる国郡の諸負担を、権門勢家を背景に拒否するにあることを公言し、寄進後もその所有権・経営権を放棄したわけではない。ここに荘園に二重の土地所有者が存在することとなった。

▼ 貴族の荘園支配の難局

* 12世紀には、農民の階層分化がすすみ、上層は大名田堵（と）として武士化し、下層は下作百姓となつて、両者の間には荘園体制とは別個の封建関係が進展し、武士化した大名田堵、武士の棟梁との間に主従関係を結んで、荘園内に別系統の支配関係を形成した。やがてこの別系統の支配勢力は、文治元年（1185）武士の棟梁源頼朝に対して守護・地頭の設置を朝廷が承認したことによって公法化し、この公権による武士の荘園侵略が進行して、貴族の荘園支配は難局に面することになった。荘園の下司権能を継承した地頭は、年貢を抑留し、下地中分によって荘園下地の私領化をすすめ、守護は半済法を実施して荘園の年貢の吸収をすすめた（『国史大辞典7』 竹内理三執筆 昭和61年吉川弘文館）。

▼ 承久没収地

承久の乱後、鎌倉幕府は、後鳥羽上皇管領はもとより、その計画に参画した側近院臣や京方武士らの所領をすべて没収した（『吾妻鏡』承久三年（1221）八月七日条）。最も数が多かったのは京方武士の有した所領・所職であり、それらは勲功のあった御家人らに地頭職として分与された。下司職・郷司職などの補任権はもともと幕府になく、荘園領主・国司らが保有していた。しかし、地頭職の進止権は幕府が掌握するところとなり、荘園領主らの在地支配権は大きな制約を受けることとなる（『国史大辞典7』 田中稔執筆、昭和61年吉川弘文館）。

(3) 幕府の弱体化

室町幕府は3代将軍・足利義満のころ、日明貿易を安定させたことで財政基盤を整えたが、南北朝の成立などの混乱期も長かったことから、幕府が直轄する地域は鎌倉幕府より少なく、その後の幕府の財政は逼迫していき、中央集権は弱体化していった。

一方、農業生産性の向上により、地方の守護・地頭は次第に独立した経済基盤を確保していくようになった。

室町幕府は鎌倉幕府より強くなかった。戦国時代前は、中央に頼らないで地方だけで管理していけるようになった。

〈室町後期・戦国時代〉

■ 室町後期・戦国時代に発生した災厄と地方自治

◎ 気候は、1420年頃まで比較的温暖で安定していたが、その後の約200年間は厳しい時代だったようだ。

(1) 気候の変動と多発した自然災害

現在、屋久杉の年輪を測定することにより、過去 2000 年間の気候変動を単年精度で復元する研究が行われている。また、世界の地質を調べることにより、自然災害の発生や規模、火山活動と噴火が気象に与えた影響なども研究されている。それらの研究は、古文書などに記された内容を裏付けるものにもなっており、1420 年代から太陽活動は停滞期を、地球は寒冷期を迎えた。地球全体に影響をもたらす火山の噴火も 1440 年代から 1480 年代にかけて世界各地で発生したことも重なり、1420 年代から地球規模で平均気温は下降していたと考えられる。それまで干ばつに対する備えは整ってきたが、冷害や大雨に対しては無防備であった。

(2) 気候変動と自然災害の一覧（正長元年（1428 年）～永禄 6 年（1561 年））

室町後期から戦国時代にかけて発生した大規模な災厄を一覧すると、1420 年を境に飢饉も 11 回程度は発生し、感染症も増大していったようだ。疫病、干ばつ、大雨洪水、冷害、蝗害（こうがい）、飢饉、天変や戦乱の発生が改元の契機となった（※ 3）。

明応 4 年（1495 年）明応鎌倉地震 鎌倉大仏殿が津波で破壊した。この地震災害が、この年伊勢氏親子が小田原城を奪取したのと関係があるのではないか、との説がある。

(3) 飢饉の発生と足軽の組織化

度重なる飢饉の発生により、これまで安定していた農業生産も危機的な状態となった。それまでの飢饉のときには山に籠って食糧を確保するなどしていたが、人口が増加してきた室町時代になると、仕事や食糧を求め、地方から都市へ人が集まるようになった。また、自然環境が変わっていくと他から奪って生きていく時代となり、惣村同士で食糧を奪い合い、惣村で自衛するようになった。鉄器の発達も自衛手段を高める要因となった。また、守護・地頭もそれまでは戦乱ごとに兵を農村から集めていたが、足軽と呼ばれていた兵を常駐させ、訓練して部隊を組織化するようになっていった。

(4) 乱取り

自衛手段として次第に組織化されていった足軽だったが、武力が増大していくと、都市部では権力の争奪の手段として、また地方では食糧の攻撃・略奪する手段として武力を行使するようになっていき、各地で乱取りと呼ばれる騒乱が常態化していき、戦国時代を迎えることとなった。乱取りの一例として、長尾景虎（上杉謙信）は、秋から冬にかけて関東で宿営しながら戦闘を繰り返し、春になると越後へ戻って行ったと言われている。これは、越後は二毛作が出来ない地域であることから、雪が積もることで他国から攻め入られる心配がない冬場に、温暖な地域へ自国の兵を動かして、他国の食糧を乱取することで兵の食糧は確保し、同時に国元の食糧を食べる人数を減らすことが目的だったとも言われている。また、武田晴信（武田信玄）も他国から食糧を乱取り、甲州に戦利品として持ち帰っていたことが富士御室浅間神社（山梨県河口湖町）に伝わる『勝山記』に記されている。

■ 平子（たいらこ）氏と本牧村四ヶ村

平子氏は源頼朝が平家討伐に向けて挙兵したときから頼朝に付き従った武将の 1 人とされ、鎌倉幕府が開かれたときには、鎌倉の出入口からほど近い、現在の磯子から本牧あたりを所領とした御家人である。

(1) 出自

平子氏は武蔵七党である小野姓横山党の一族との説がある。『武蔵七党系図』は横山・猪俣・野与・村山・西・児玉・丹（丹治＝たんじ）の七党からなる一族で、江戸後期に編纂された群書類従（ぐんしょるいじゅう）（※ 4）という叢書には、小野氏系図は敏達天皇の孫小野妹子から小野篁、その 8 代後の義孝が初めて横山庄に住み、横山大夫を名乗ったとしている。横山庄とは、現在の八王子市街地を中心に、上柵田（かみくぬぎだ）・片倉・相原を含む地域一帯を指す。現在も八王子市に横山町という地名が残っている。

また、平子氏は『桓武平氏系図』の中に、平良文（村岡五郎）・忠頼・忠通と続き、忠通の子として、為道（三浦氏の祖）、景道（平子民部太夫）、景名とあり、三浦一族との説もある。

平子氏が実在していたことは間違いなく、平子氏は地味な存在で細く長く、300 年くらい玉縄城周辺で生きて、

室町時代に平子郷と称する所領を治めていた（現在の横浜市南区所在、宝生寺の古文書に記述）。

(2) 『吾妻鏡』にみる平子氏

*文治元年（1185年）4月15日条には、源義経とともに頼朝の許しを得る前に朝廷から任官され、頼朝が墨俣（岐阜県大垣市）以東に下向したら、斬罪にするとした名前の中に平子馬允有長の名がある。

*しかし、その後の建久元年（1190年）11月7日条に頼朝が六波羅に入った時の先陣随兵や後陣随兵平子有長とその子である平子有貞と思われる名が見られることから、平子氏は比較的早い段階で頼朝の許しが得られて、平子郷へ戻れたのではないかと考えられている。

*建久4年（1193年）5月28日条には、曾我兄弟の仇討ちの際に最初に組み打ち負傷した者の中に、「平子野平右馬名允」の名前がある。建久6年（1195年）3月10日条では頼朝が東大寺供養に参列し、東南院から石清水を経て、六波羅に帰ったときの先陣随兵の中にも「平子右馬允」の名前がある。

(3) 武蔵と越後の地頭職

平子経久は武蔵と周防国に所領を有していたが、承久の乱のあと、越後の地頭職を得た（※5）。

(4) 石河・禅馬・根岸

南区堀之内町にある寶生寺は、真言宗御室派の寺院で、鎌倉期から江戸中期までは、最盛期には50以上の末寺を持つ横浜中部地域の中核となる寺院であった。平子氏が磯子区から本牧あたりを所領とし、平子郷と呼ばれていた時代の寶生寺の古文書には、平子氏や地域の名前が記されたものが多く残されている。

*石河村～横浜村・中村・堀之内村辺りの地名で（応永20年（1413年）の文書（宝生寺文書（神奈川県立博物館保管・寄託））。

*禅馬村～岡村・滝頭村・磯子村周辺の地名（宝徳2年（1450年）の文書（前同宝生寺文書））。

*根岸村～現在の根岸駅周辺、山手駅・山手隧道辺りの地域（寛正4年（1463年）の文書（前同宝生寺文書））。

(5) 本目（本牧）の登場

本牧の地名の初見は、石河・禅馬・根岸より遅く、永正9年（1512年）に伊勢宗瑞（北条早雲）・氏綱親子が平子牛法師丸へ送ったとされる制札（※6）に、初めて「本目」という文字で本牧の地名が登場した。その後、平子郷という地名は登場することは無くなり、本牧郷と呼ばれるようになった。

（本牧四ヶ村 ⇒ 本牧・禅馬・根岸・石河戦国時代の村名から江戸時代の村名に比定すると、次の場所が本牧四ヶ村ではないかと推定されている。禅馬：滝頭・岡村・磯子村、根岸：根岸村（上・馬場・下・芝生・加曾・立野など）石河：横浜村・中村・堀之内村、本牧：本牧本郷村・北方村）

(6) 平子氏の行方

伊勢宗瑞（北条早雲）・氏綱親子が牛法師丸へ制札を送ってから本牧四ヶ村での平子氏の話はなくなる。その制札の写しが米沢市の上杉文書に記録されている。本牧四ヶ村を治めていた平子氏は、越後や周防にも所領を持っていたことから、越後にいた平子氏を頼って伊勢氏から逃れたのではないかと推測されている。制札や禁制を受領することは家臣になることを認めることである。伊勢氏は戦わないで本牧を所領出来たのである。

伊勢氏が相模東部に進出していたころ、越後の平子氏は長尾景虎（上杉謙信）の配下となっており、その後、越後から会津、米沢へと移封されていった上杉氏に従ってともに移転していることが分かっている。現在も米沢市郊外には平子（たいらこ）氏の一族が暮らしている。そのような経緯から伊勢氏から平子氏へ送られた制札が上杉文書に記録され、米沢で保管されているのだろうと考えられる。

(7) 本牧郷

小田原北条氏が相模東部に進出してから、平子郷という地名は消え、本牧郷という地名が使われるようになった。

先に示した本牧四ヶ村は、その後の小田原北条氏の古文書から本牧郷と呼ばれるようになったことがうかがわれる。

江戸時代に入ると、本牧は本牧領と呼ばれるようになり、その地域は現在の中区・西区・南区・港南区・磯子区にあった36カ村であったことが、江戸後期に幕府が編纂した新編武蔵風土記稿から確認できる。

■ 江戸内湾の交流

江戸内湾は水深も浅く、陸路で行くと数日かかる房総半島から武蔵・相模への距離も、江戸内湾を船で渡れば、櫓を使って手漕ぎで向かって数時間で到着できる距離であったので、海を通じて、本牧をはじめとする武蔵・相模の沿岸部の村と房総半島の村の交流は古くから盛んだったようだ。

(1) 吾妻神社

古事記や日本書記には、走水から木更津へ渡る日本武尊とその妻・弟橘姫の悲しい伝説が残されており、妻の死を悲しみ、建立した神社が木更津の吾妻神社だと言われている。その吾妻神社の本尊が本牧に流れ着き、建立されたのが本牧にある吾妻神社と言われている。伝説の真偽は確かめようがないが、その当時から江戸内湾沿岸部の村々は船を使った交流が盛んだったようだ。

中世には、称名寺（金沢区）が房総に荘園を有していた時代があり、古代や中世から住民交流も盛んに行われていた様子も伺われる。現在でも本牧と木更津などの人たちが所帯を持ち、縁戚関係がある家族も多い。

(2) 半手（はんで）・半済（はんぜい）

小田原北条氏が相模東部や武蔵まで勢力を拡大していくころ、現在の房総半島では南端部を所領としていた里見氏が、上総・下総・武蔵・相模へ勢力を拡大しようとしていた。里見氏は、当時は海賊と呼ばれていた水軍を使って武蔵や相模に上陸し、対岸に里見氏の拠点を作ろうとしていた。対する小田原北条氏も、江戸内湾の房総沿岸に拠点を作するために画策をしていたようだ。

沿岸部に限らず、戦国時代には自分たちが有している所領と敵対する所領の境目となる地域が必ず存在した。武力で制圧し境目を拡大しようすると境目の地域では戦乱が絶えなくなり、また、その境目の地域が何らかの理由で重要な拠点となる場合には、なおさら戦闘が激しくなった。

和睦をして境目の地域を非戦闘地域にすることもあったが、武将は境目となる地域を懐柔し、味方として協力してもらおうことも考えていたようだ。

住民を味方につけるための方策が、「半手」「半済」であり、各地の古文書に出てくる。住民が強くなり、したたかさを身に着けたのが戦国時代である。

（注）～ ●半手（はんで）：領主側から住民に示す租税半納要求 ⇒ 境目を越えた領土支配、現在の領主からの搾取防衛に協力。●半済（はんぜい）：住民側に有利な形態 ⇒ ○貢租の半分を納めればよい特権・権利。自主的に、貢租の半分を支払うから安全保障を要求、地域住民の安全保障を確約できなければ、領主としての資格を認めない。⇒ ○惣村・郷村の勢力が強くなった結果、得た権利。

【 小田原北条氏の玉縄・本牧・三浦への進出、その後の所領拡張、終焉 】

■ 小田原北条氏の進出と玉縄城

小田原北条氏は、伊豆・韮山から小田原城を奪取し、相模を平定した。当初は武蔵や安房・上総からの攻撃に備えるため、玉縄城から小机や本牧・三浦の守りを固めたが、江戸内湾を制圧し、関東一円を領地に治める勢いを持つと、それぞれの拠点の役割が変化していった。

(1) 伊勢宗瑞 ～ 駿河に来るまで

伊勢宗瑞は一般的には北条早雲として知られている戦国武将である。宗瑞の死後、宗瑞の子・氏綱が名字を伊勢氏から北条氏に改めたこと、法名が早雲庵宗瑞となっていることから、のちに北条早雲と呼ばれるようになった。本人は伊勢新九郎盛時や伊勢宗瑞と名乗っていたようである。

出自は一般の素浪人との説があったが、現在では室町幕府の政所執事を務めた伊勢氏のうち備中を拠点とする支流の生まれとされている。文明 15 年（1483 年）に 9 代将軍足利義尚の申次衆（※7）に任命され、京都にいとされている。

遠江の守護大名・今川氏の家督争いの調停で駿河へ下向したことをきっかけに、今川氏の家臣となり、居城を与えられたとも言われている。

(2) 伊勢宗瑞 ～ 韮山への進出から死去まで

室町幕府と鎌倉府の対立、鎌倉公方・足利氏と関東管領・山内上杉氏との対立や、山内上杉氏と扇谷上杉氏との同族同士の対立で、関東一円は覇権を争う闘いが繰り返されるようになり、宗瑞は、その隙をつくように伊豆から相模に進出し、関東一円を治める戦国大名となっていた。

伊勢宗瑞の一生については、まだわからない点も多いことから、ここでは大まかな流れを見ることにする。

★ 明応5年(1496年)～文亀元年(1501年)⇒ 堀越公方を攻略、韮山城の拠点化、伊豆へ乱入。

★ 明応3年(1494年)9月～10月 ⇒ 宗瑞、上杉定正方の援軍として、相模・武蔵へ出陣。9月19日 上杉定正方の長尾氏重臣が守備する相模の「玉縄要害」を攻略。

★ 明応4年(1495年)9月 ⇒ 大森氏の居城であった小田原城を攻略。

★ 明応7年(1498年)8月 ⇒ 甲斐へ侵攻、堀越公方の茶々丸自害、伊豆一国平定。

★ 永正9年(1512年)10月 ⇒ 玉縄城築城。12月 本目(牧)四ヶ村制札。

★ 永正13年(1516年) ⇒ 三浦義同(三浦道寸)を攻略、三浦氏の滅亡。

★ 永正16年(1519年) ⇒ 宗瑞死去

(3) 玉縄城の築城(※8)

本丸跡は現在の清泉女学院にあったとされ、堀と思われる跡が残されている。柏尾川や境川を外堀と見立てた高台に位置し、柏尾川から境川を通り、相模湾へつながる水運にも恵まれた場所である。三浦半島の付け根に位置し、三浦氏の拠点であった三崎城や上杉氏が拠点としていた小机を活用するための拠点ともなること、江戸内湾に面した本牧・根岸・金沢を拠点とできることなどが、玉縄城築城のきっかけになったと考えられている。玉縄城を築城して海岸線を制することができた。

伊勢宗瑞の次男氏時が初代の城主となり、玉縄衆という家臣を率いた。次男を城主にした点からも、小田原北条氏にとって重要な拠点だったことがうかがえる。

玉縄は、相模湾や江戸内湾の海防拠点であり房総半島へ進行する拠点となる本牧から三浦半島沿岸と小田原を繋ぐ重要な支城であり、相模から武蔵・関東北部へ進出するときの陸路としても重要な支城となった。

< 玉縄城主 > 氏時(宗瑞の子) 一為昌 一綱成(今川氏一族から北条氏へ養子) 一氏繁 一氏舜 一氏勝。

(4) 小田原北条氏の勢力拡大(※9)

小田原北条氏が勢力を拡大していくと、境目となる甲斐や武蔵・上総・安房からの攻撃に備える一方で、境目となる他の地域を攻め、制圧していった。小田原北条氏の3代・氏康は、鎌倉公方や山内上杉氏・扇谷上杉氏を北関東や越後へ追いやり、江戸内湾での主導権を掌握すると、小田原北条氏の拠点を相模から、武蔵・上野へと広げていった。拠点の移動に伴い、本牧などの江戸内湾沿岸部での海防の重要性は薄れていき、陸上戦への備えや駿河湾での海防が課題となっていったようだ。

永禄3年(1560年)5月、織田信長が桶狭間の戦いで今川義元を討ち取ると、小田原北条氏と良好な関係であった今川氏は急速に弱体化していった。

武田信玄は駿河湾へと侵攻し、水軍を結成したことで、小田原北条氏は武田氏と陸でも海でも戦わねばならなくなかった。織田信長や徳川家康という新たな勢力も誕生した中で、越後の長尾景虎は永禄4年(1561年)3月に関東へと侵攻し、小田原城を包囲した。小田原北条氏は籠城戦で勝利し、長尾景虎(上杉謙信)を退却させたようだ。閏3月に鶴岡八幡宮で上杉家の家督を相続し、関東管領として長尾景虎は上杉謙信を名乗ったが、玉縄城も攻め落とすことができずに退却したようだ。永禄12年(1569年)には武田信玄が小机城・寺尾城へと侵攻したが、攻めきれずに退却したようだ。

(5) 里見氏との決戦

*永禄6年(1563年): 小田原北条氏は国府台での里見氏との合戦に勝利し、南関東を制した。

*天文7年(1538年): 第1次国府台合戦(現・市川市)、小弓公方(おゆみくぼう)・里見氏 × 北条氏綱(2代当主) ⇒ 小田原北条氏が勝利。北条綱成(玉縄城主)が有吉城(千葉市緑区)を築城し拠点とする。

*天文 21 年 (1552 年) : 綱成が有吉城での籠城戦で、里見勢の攻撃を退ける。

*永禄 7 年 (1564 年) : 第 2 次国府台合戦 (現・市川市)、支配拠点の江戸をめぐる抗争、里見義弘 (敗北) × 北条氏康 (3 代当主) ⇒ 小田原北条氏が勝利、南関東を制圧。

(6) 北関東での陸戦

*小田原北条氏は里見氏との戦いに勝利し、北関東へ進出。龍珠院 (磯子区岡村) に氏繁 (綱成の嫡子、玉縄城主) 発給文書がある。

*佐竹氏 (常陸) との抗争も始まり、下総逆井城 (飯沼、茨城県) を築城した。⇒ 玉縄城主が先陣となり北関東へ進出、東京内湾は制圧、小田原北条氏による関東全域支配の動き、上杉氏・武田氏との抗争が激化。

(7) 駿河湾での海戦

*三崎城の城主、北条氏規が韮山城主 (伊豆) も兼務 ⇒ 小田原北条氏は、沿岸部も房総半島・三浦半島・伊豆半島にまたがることに、小田原北条水軍の巨大化、紀伊から水軍を傭兵として雇用。

*天正 7 年 (1579 年) 9 月頃、武田勝頼、三枚橋城を完了させ、伊豆への備えを確立 ⇒ 小田原北条氏は長浜城の警備を強化し、水軍として雇用した梶原氏を配備 (三枚橋城も長浜城も現在の沼津市内)。

*天正 8 年 (1580 年) 3 月 15 日 駿河湾の海戦、武田氏 × 小田原北条氏。⇒ 武田水軍は久能山 (現・静岡岡市) まで占拠。

(8) 小田原北条氏の終焉

*天正 10 年 (1582 年) 3 月 信長軍の侵攻で武田氏は滅亡。同年 6 月 本能寺の変後、家康は甲斐・信濃を制圧。

*天正 18 年 (1590 年) 豊臣秀吉による小田原征伐。⇒ 徳川家康が三河から関東へ移封。家康は、武田氏・小田原北条氏の旧臣を採用。

*小田原北条氏 5 代当主・氏直は、家康の娘婿であったことから、豊臣秀吉の小田原攻めで降伏した後は助命され、高野山に幽閉された。翌年 (1591 年) 氏直は病死したが、助命された三崎城主・氏規は、のちに河内狭山藩主 (現・大阪府狭山市) となった。

<幕末>

【 幕末の本牧 】

■ 本牧での海防 (幕末)

小田原北条氏が江戸内湾を制圧してから、本牧地域は海防拠点としての重要性は無くなった。しかし、その 300 年以上経ってから、急速に本牧が海防の最重要拠点として注目を集めることとなった。

(1) 東京内湾の地形と本牧

東京内湾の海底には、2 万年前の最終氷期により生まれた古東京川と呼ばれている谷戸がある。また 6 千年前には縄文海進により外海からの潮流が観音崎や鋸山、本牧の海辺を浸食し崖を形成した。また浸食された土砂は川から運ばれる土砂とぶつかる場所や潮流が滞る場所に堆積して、砂州や遠浅の海を形成していった。

2 万年前の海退と 6 千年前の海進により、本牧の海底は、広い遠浅の砂浜と、現在も大型タンカーやコンテナ船が航行している浦賀水道から続く海底の谷戸を合わせて持つ地形となった。

(2) 本牧が再び海防拠点に

幕府はペリー艦隊再来前から、艦隊との交戦も想定し、鳥取藩に本牧での警備を命じた。何故、鳥取藩が本牧を警備するのか、それは当時の鳥取藩は、水戸藩主徳川斉昭の五男で後の十五代将軍慶喜の兄・池田慶徳が藩主を勤めていて、当時 32 万石を誇る有力な藩だったからである。また、ペリー艦隊が浦賀を突破し交戦となったとき、海底の谷戸は本牧沖まで繋がっていることから、江戸を守るための最後の海上の最終防衛拠点は本牧の半島になると幕府は考えたようだ。日本海の海防のため西洋流砲術にも長けていた強大な藩であったからこそ、鳥取藩に本牧の警備を任せただのではないとも言われている。嘉永 6 年 (1853 年) のペリー艦隊初来航の

ときに、ペリー艦隊への対応を行い黒船の内部も検分した浦賀奉行所は、老中・阿部正弘に本牧に強大な台場造成と軍艦の配備を進言したが、台場建設も軍艦製造も見送られたまま、鳥取藩は本牧警備を担当した。小田原北条氏と里見氏の死闘が繰り広げられた江戸内湾にあった本牧は、およそ 300 年の時を経て、再び海防の地となった。

(3) 北亜墨利加人本牧鼻ニ切附タル文字ヲ写

ペリー艦隊は、嘉永 6 年 (1853 年) に久里浜へ上陸したときは金沢沖まで海底の測量をしていた。嘉永 7 年 (1854 年) に 2 度目の来航したときには、江戸湾全体を測量して、正確な海図を作成している。ペリー艦隊は、海底地形の測量をしながら艦隊の停泊場所を検分し、幕府が想定した通り、本牧沖に停泊した。ペリー艦隊も 2 万年前に出来た海底の谷戸を航行してきた。本牧沖に停泊した黒船の中で幕府とペリー艦隊は、およそ 2 か月間、日米和親条約の内容について交渉を行った。

一度も戦闘など起こることなく、日米和親条約は締結され、日本は鎖国から開国へと大きく政策を変えていくことになった。

【 まとめ 】

講師は、本講座を

- ▼ 本牧は、平子氏が所領していた時代は「平子郷」と称していた。平子氏が小田原北条氏に滅ぼされ「本牧」と称することとなった。平子氏は越後の上杉の家臣となり生き延びた。
- ▼ 小田原北条氏から徳川氏の所領となり「本牧領」と称するようになった。江戸時代は漁村として栄えた。
- ▼ 本牧は小田原北条氏 — 徳川氏 — 幕末と通じて要害の地であった。幕府は東京内湾の地形から幕末の海防の最終決戦地は浦賀・本牧として、最後は本牧警備を鳥取藩に担当させた。外国との最後の戦争を鳥取藩に託したのである。
- ▼ 本牧は、北条氏と里見氏との戦いから 300 年後の幕末に注目されることとなった。

とまとめました。

最後に「ペリー艦隊が測量した江戸湾の海図を各国に売り払っています」と述べ講演を終了しました。

.....

(参考 1) ◆ 公開講座配布資料 <1>「玉縄城と本牧郷 小田原北条氏の進出と本牧の役割」 A 4 判 20 頁・20 枚、<2>「横浜八聖殿 (はっせいでん) 郷土資料館」 A 3 判 4 頁・枚 (※以後、「配付資料」とする)。

(参考 2) ◆ 新型コロナウイルス感染防止対策の基本 (マスクの着用、手指消毒、検温、席の間隔確保、会場内の換気) を徹底して、開催された。

(参考 3) ◆ (※ 1) 選挙の神様 : 1914 年 (大正 3 年) 第 2 次大隈内閣が実施した第 12 回総選挙で与党立憲同志会の選挙長を務めて大勝し、徳富蘇峰から「選挙の神様」と評された (フリー百科事典『ウィキペディア』安達謙蔵)。◆ (※ 2) 惣村・郷村と呼ばれる村組織 : ~中世の自治的な村落共同体。室町時代から現れ、江戸時代に確立した村落制度。鎌倉時代の末から荘園単位に名主 (みょうしゅ) による惣の組織がつくられ始めたが、中小農民の台頭によって、室町時代から自然村落を基礎にした住民全体の生産、生活、権利闘争のための村落共同体の性格をもつ惣村が広く成立した。惣村はおとな、沙汰人 (さたにん) らの指導者を選び、村民全員の寄合によって運営され、惣有地、灌漑用水の管理、共同の祭祀、年貢の地下請 (じげうけ)、自検断、掟の作成等を行い自治組織として発達した。荘園制の、解体のあとの自治的結合 (『世界大百科事典 16・

9』村田修三執筆、2009年、平凡社。『日本語大辞典』1989年、講談社)。◆(※3)改元の契機となった自然災害の発生：<1>享徳元年(1452年)疫病のため改元。<2>長禄元年(1457年)疫病・干ばつのため改元。<3>長禄4年(1460年)大雨洪水、冷害、蝗害(こうがい～大群で移動しつつ農作物を加害するバッタ類の成・幼虫の害一『世界大百科事典9』・2009年・平凡社)、飢饉により改元。<4>明応元年(1492年)疫病のため改元。<5>大永元年(1521年)天変や戦乱のため改元。<6>天文元年(1532年)疫病・戦乱のため改元(配付資料)。

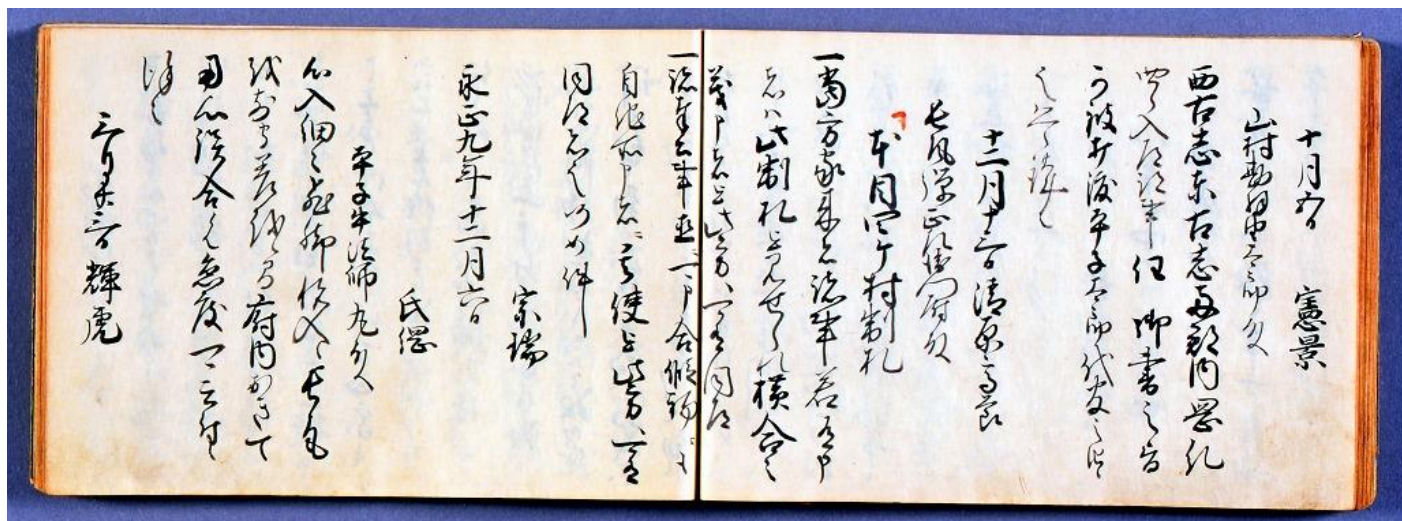
(※4)群書類従という叢書：塙保己一(はなわほきいち)編、正編530巻、続編150巻からなる日本最大の叢書(一度世に出た単行の書物を集め、ひとまとめの書物として再出版したもの)。1779年(安永8)より刊行し1991年(明治44)に全巻完了。保己一没後、子・忠宝(ただとみ)、孫・忠嗣が保己一の遺志を継いで刊行。収載範囲は、中古・中世を中心に多様多様で当時の稀覯(きこう)・貴重文献をほぼ網羅する観を呈しており、国史・国学をはじめ学界に寄与した恩恵は計り知れない(『世界大百科事典8』鈴木淳執筆・2009年・平凡社。『同16』勝村哲也執筆・同)。◆(※5)平子経久の越後地頭職：諸州古文書(現・国立公文書館所蔵)【意識】將軍家政所下文(くだしぶみ)一鎌倉幕府の政所(まんどころ、幕府の主要な政治機構)から平経久へ命ずる。さっそく貴方の領知として、武蔵国久良岐郡平子郷内の石河村及び越後国山田郷に関する地頭職を命ずるが、この者は父親である経季の寛喜3年(1231年)3月10日の讓状(ゆずりじょう、遺言状のような性格の文書)で領知を承認するものである。但し弟2人分の領知はけっして掠奪してはいけない(配付資料)。(※6)

伊勢宗瑞・氏綱親子の制札・歴代古案(米沢市上杉博物館所蔵)本目(牧)四ヶ村制札【意識】本牧の四ヶ村に対する掟書。一、我らの家臣(=北条氏家臣)に、この制札をみせて、もしそれ以外の無理難題を申す者があれば、我らのもと(=小田原)まで連行しなさい。一、諸役を賦課する場合には、我ら(北条氏)の方から直接命じるから、それ以外の者でそのように命ずる者があれば、その者も我らのいる小田原まで連れてきなさい。以上である永正九年(1512年)十二月六日 宗瑞(北条早雲) 氏綱(北条氏綱) 平子牛法師丸(房長)殿(配付資料)。◆(※7)申次衆：室町幕府の職名。申次とは、取次のことであり奏者とも称された。鎌倉時代の申次にならい、室町幕府でも將軍への諸事の取次役を申次といい、さらに家柄に固定化がみられようになるとともに、これに携わる者を申次衆と称するようになった。申次衆の成立は六代將軍足利義教の永享期と考えられる(『国史大辞典 第13巻』二木謙一執筆・平成4年・吉川弘文館)。◆(※8)玉縄城の築城：新編相模国風土記稿【意識】城廻村の玉縄城址：永正9年(1512年)10月、北条早雲(伊勢宗瑞)が築城した場所である。寛永北條家譜によると、北條新九郎長氏(伊勢宗瑞)が、永正9年10月、相模玉縄城を築城する。推察すると、本年8月、北條早雲は三浦道寸の居城である大住郡の岡崎城を占拠し、北方へ逃走する三浦氏の軍勢を追い、最終的に三浦郡へ赴いて住吉城を開城させ、道寸は遂に三浦郡の新井城へ退去した。こうして宗瑞は相模国中を平定するために玉縄城を築城することになった。

大永・享禄(1521～31)の頃には、北条氏時(氏綱の弟で幻庵の兄。初めは葛山備中守の養子となり、のちに北条氏へ戻る)の居城であったと伝えられる

<画像資料> (配付資料)

(※6) 宗瑞・伊勢氏制札写 歴代古案四 上杉文書



※9 小田原北条氏 最盛期の領域図 永正九年十二月六日 米沢市上杉博物館所蔵



(注) この公開講座記録は、講師講演と配付資料を基にまとめました。